封印の扉～受け継がれし力～

ティムキャンピー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
封印の扉～受け継がれし力～

【Ｎコード】
Ｎ０２２８Ｌ

【作者名】
ティムキャンピー

【あらすじ】
魔物達を封印していた扉が開かれ魔物達が世界に放たれてしまった。
その魔物達を封印するべく神流ライトの旅が始まる。
はたして魔物達を封印することはできるのか・・・・・・

1話旅立ち

昔、魔物達が多くいた時代神流カイトという人物が命を代償に魔物達をある扉に封印した。
その扉の名は「フウカイシン」
この扉は代々神流家に守られてきた。

だがある日何者かの手によって壊され魔物達が世界に放たれてしまった・・・・・。
その魔物達を再び封印するため少年神流ライトの冒険が始まる・・・・。

周りが要塞で囲まれている国アインドマッシュ。そこの中央にある商店街にライトはいた。
（ライト）「お～いケイ～準備できたぞ～。」
（ケイ）「そうか。じゃあ行くとするか。」
ケイは小さい頃親を亡くした俺を育ててくれ、光欠片に認められ魔物達を倒せる武器「アマンズデイド」を覚醒させた俺の兄貴的な存在だ。

（ライト）「ケイっ。魔物達を封印するには光玉っていう神玉がいるんだよな～？」
（ケイ）「あぁ。そうだ。」

（ライト）「今はどこにあるんだ？」

（ケイ）「それがわからねぇんだ。フウカイシンの封印が解かれたときに消えたらしいんだ。
だからとりあえず北にある世界の情報を管理している国

イーターメイスに向かうぞ」

（ライト）「イーターメイスへ着くためのルートはきまってるのか？」

（ケイ）「最短のルートはファマストっていう森を通ってホワイトマウンテンっていう山
通る道だな。他にも色んな道があるがどうする？」

（ライト）「じゃあ最短の道でいこうぜ！　今このときでも魔
物が人をおそってるかもしれないんだからさ。」

（ケイ）「珍しいないつもなら色んなものを見たいからって言って遠回りの道を選ぶのにな。
何かあったか？」

（ライト）「何もないよ・・・・。」
ライトは無意識に頭をかいた。

（ケイ）「なにかあったんだろ？今さっきまた頭かいてたぞ。」

（ライト）「うそっ！また～」

（ケイ）「ライトお前隠し事なんてしても無駄だぞ。」

（ラ）「はぁ～やっぱ無理かー。この国に来てから勉強勉強で次の国に行ったら
魔法や戦い方を教えてやるってケイがいったからだよ。もうあんなことは嫌だから・・・。」
ライトが少し涙目で言った。

（ケ）「それでか。しゃあねぇ～イーターメイスに着いたらすぐに教えてやるよ。」
（ラ）「絶対だからな。」
ライトとケイが話しているうちにアインドマッシュの出口が見えてきた。
（ケ）「こっからの旅は厳しくなるぞ。ちゃんと着いてこいよ！」
こうしてライトとケイはアインドマッシュから旅立った。
はたしてライトとケイは無事にイーターメイスへ着くことができるのか・・・・

続く

1話旅立ち（後書き）

初めてなので色々言ってくれたら助かります。よろしくです。

2話出現！？

ライトとケイはティストという小さな村に向けて一本道を歩いていた。
ティストとはアインドマッシュとファマストのちょうど中間地点にある村だ。

（ラ）「それにしてもいきなりなんでティストって村にいくことになったんだ？」
（ケ）「えっ！それはなお前に見せてやりたくてさ、自然が豊かで良い村なんだ。」
ケイは冷や汗をかいていた。
ティストに行く理由が、本当は食糧を持ってくることを忘れてしまったからだ。

（ラ）「ふぅ～ん。まいっか、俺もいろんなとこに行きたいしな。」
そう言ってライトは口笛を吹きながらまた歩き始めた。

アインドマッシュから歩き始めて3時間がたとうとしていた。

（ラ）「ケイ～なんか村らしきものが見えてきたけどあれがティストか？」
（ケ）「どうやら到着のようだな。あれがティストだぞ。」

ティストとわかったとたんライトは走り出していた。

（ケ）「ライトっ。そこはすべりやすくてこけやすいぞ～」
（ラ）「そんなの大丈夫だ～いだ。」
ライトがそういった瞬間、ライトはこけた。

（ラ）「いって～」
（ケ）「ほらな。だから言ったのに、馬鹿にはいっても無駄だったか。」

（ラ）「悪かったな馬鹿で。」
ライトはそういってすぐさまティストに向けて走り出した。

（ラ）「とうちゃ～く。それにしてもケイの言った通り自然がきれいだな～」
（ケ）「おいっ。何ぼーっとつったってんだ。早く宿屋を探すぞ。」
この世界では宿屋がすぐにわかるように三つ葉のクローバーの印がはってある。
きくところによると四つ葉のクローバーの印の宿屋もあるらしい。

（ラ）「ここのクローバーはどうかな～。なぁんだ三つ葉か。
ケイ～宿屋あったぞー。」

（ケ）「じゃあ入るか。もう少しで日も沈みそうだしな。」
ライトとケイは宿屋に入っていった。
宿屋の受付には６０才前後と思われるおばぁちゃんが座っていた。

（ラ）「おばぁちゃん、空いてる部屋ある～？」
（おばぁ）「一つだけ空いてるよ。２人だけかい？」

（ラ）「そうだよ。じゃその空いてる部屋の鍵頂戴。」
（おばぁ）「はいよ。２階の奥の部屋だからね。」

（ケ）「じゃさっさと行くぞ。」

空いていた部屋は風通しも良く外の眺めもよくきれいな部屋だった。
（ケ）「これまたきれいになったものだな。前来た時はもっと汚かったんだけどな。
　じゃあライト、俺は用事があるからな。１０００ウェルやる、それでこの村を
　探検でもしてきな。それで夕飯もとっておけ。１０時ぐらいまでには帰っておけよ。
　じゃあまたな。」

こうしてケイは出て行った。

（ラ）「じゃ、俺も行くとするか。」
ライトも夕飯をすますために宿屋をでていった。

（ラ）「にしても疲れたな～。これは早くご飯食べて寝るとするか。」
ライトは小走りでティストに１つだけあるレストランにむかっていった。
ライトはレストランらしき店を見つけた。

（ラ）「ここかな～？まっ入ってみるか。」
入った店にはテーブルがたくさんおかれていて、村人たちがたくさん集まっていた。
（ラ）「どうやらあってたみたいだな。」
ライトは近くにあった椅子にこしかけた。
厨房には若いおねぇさん１人と宿屋にいたはずのおばぁちゃんがいた。

（おばぁ）「おっ、またあったね。注文は？」

（ラ）「奇遇だね。じゃあオムライスで」
（おばぁ）「はいよ。」

（おばぁ）「できたよ。」
（ラ）「早っ。まだ5分ぐらいしか経ってないのに！まいっかいただきま～す。

おっうまい。料理上手だねおばぁちゃん。」

（おばぁ）「ありがとね。」

（ラ）「ごちそうさまでした。おばぁちゃんお代は？」
（おばぁ）「３００ウェルだよ。」
（ラ）「はい。じゃまたね。それじゃ宿屋に戻ることにするか。」

ライトが宿屋に戻ろうとした時、宿屋の近くの家が音を立てて崩れ去った。

（ラ）「なんだ？何があったんだ？」

続く

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0228l/

封印の扉～受け継がれし力～

2010年10月15日23時02分発行